

## 母(かあ)べえ

表題と写真は、2007年に中央公論新社から出版された野上照代さんの本である。長年にわたり黒澤監督のスクリーンライターとして活躍した著者が、両親への鎮魂を込めて綴った幻の名作「父へのレクイエム」の改題という。

「あとがき」には、父は1926年、大学を卒業するや日本大学予科教授に就職し、「新島繁」のペンネームで執筆活動をしていたのが治安維持法にかかり、忽ち思想上の理由で、日大を追放されたという。その後、何度も検挙され、1940年4月拘置所に入獄、12月保釈出獄した。この「往復書簡集」は、拘置所内の父と留守家族の書簡である。父はそれを大切に保存し、戦後、それらが散逸しないように、整理して大学ノートに書き写したのである。--- まさか、そのノートが60年後の今、映画になって甦るなどと、勿論、父も母も予想もしなかったことである。

表紙カバーのように、山田洋次監督、吉永小百合主演で映画化され、大きな話題を呼んだ。「母べえ」役の小百合さんの演技が忘れられない。山田監督はこの本で「『母べえ』が映画になるまで」として、冒頭に竹内浩三の詩「骨のうたう」を載せている。

戦死やあわれ 兵隊の死ぬるや あわれ  
遠い他国で ひょんと死ぬるや だまって だれもいないところで  
ひょんと死ぬるや ふるさとの風や  
こいびとの眼や ひょんと消ゆるや  
国のため 大君のため  
死んでしまうや その心や

この美しくも哀しく、その奥にはげしい戦争への怒りが煮えたぎる詩を書いた若者。赤紙一枚で戦争に連れ出され、フィリピンの山中で「ひょんと」戦死して遺体も見つからなかった天才詩人竹内浩三。この人がぼくの最新作『母べえ』誕生のきっかけになってくれたとあっていい。

『母べえ』が出版・上映された頃に比べて、残念ながら「戦争」という言葉が現実味を帯びつつある。『母べえ』で描かれた「暗い時代」を考えると、自由に書き、発言できることがいかに大切なことか。  
(2014年10月4日)

